大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

早大図書館伊地知文庫『楢葉抄』の翻刻と研究（中）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹下, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011086

早大図書館
伊地知文庫

『楢葉抄』の翻刻と研究（中）

竹下　豊

巻第八

150 いはそゝくたるみのうへのさわらひのもえいつる春になりにける哉　志貫皇子【一四一八】　」24オ

新古に入【春上・三二】。

151 こそ（イいにしとし）の春いこしてうへしわかやとのわかきの梅は花咲にけり　中納言阿倍広庭卿【一四二三】

拾遺にいにしとしねこじてうへしとして入【雑春・一〇〇八】。

152 春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ねにけり　山部宿祢赤人【一四二四】

古今に入【仮名序】。

153 わかせこにみせんとおもひし梅花それともみえすゆきのふれゝは　同【一四二六】

後撰に入【春上・二二】

154 あすよりはわかなつまんとしめし野にきのふもけふも雪はふりつゝ　同【一四二七】

新古に初五あすからはとして入【春上・一一】。

155 蛙なくかみなみ川に影みえていまかさくらん山ふきの花厚見王【一四三五】　」24ウ

朗詠に入【春・一四二・「厚見女皇」と表記】。

156 時は今春になりぬとみ雪ふるとをき山辺にかすみたなひく　中臣朝臣武良自【一四三九】

新古に入。よみ人しらずとす【春上・九】。

157 うちきらし雪はふりつゝしかすかにわかへのそのに鶯なくも（イわかいき）　大伴宿祢家持【一四四一】

後拾遺に〔入〕〈ミセケチ〉下句わが家の園に鶯ぞなくとして入。

後撰にはよみ人しらず【春上・三三】、拾遺には家持とす【春・一一】。

158 春の、にあさるき、すの妻恋にをのかあたりを人にしれつ、　同【一四四六】

拾遺にをのがありかをとして入【春・二一】。

159 かみなみのいはせの杜の郭公ならしの岡にいつかきなかん　志貴皇子【一四六六】

新勅に入。田原天皇御製とす【夏・一四五】。　」25オ

160 わかやとのなてしこの花さかり也手折てひとめみせん子も哉　大伴家持【一四九六】

新続古に第三句咲にけりとして入【夏・三一八】。

161 夏の野のしけみにさける姫ゆりのしられぬ恋はくるしきものそ　大伴坂上郎女【一五〇〇】

続拾(後)に結句くるしきものをとして入【恋一・六三三】。

162 ゆふされはをくらの山に鳴鹿のこよひはなかすいねにけらしも　岡本天皇【一五一一】

続古に入、舒明天皇とす【秋下・四四四】。

163 久かたのあまの河瀬にふねうけてこよひか君かわかりきまさん　山上臣憶良【一五一九】

続後撰にあまの河辺に舟よせて、わたりきまさんとして入【秋上・二五四】。

164 秋たちていくかもあらねはこのねぬる朝けの風はたもとさむしも(イすゝしも)　安貴王【一五五五】

拾遺に第二いくかもあらねど、結句たもとすゞしもとして入【秋・一四一】。　」25ウ

165 あすか川ゆき、の岡の秋萩はけふふる雪(ママ)に散かすきなん　丹比真人国人【一五五七】

新勅に入。よみ人しらずとす【秋上・二三二】。

166 かみな月しくれにあへるもみちはのふかは散なん風のまに〳〵　大伴宿祢池主【一五九〇】

新勅に入【冬・三六二】。

167 さをしかの朝たつのへの秋萩に玉とみるまてをける白露　大伴宿祢家持【一五九八】

新古に入【秋上・三三四】。

168 たかまとの野への秋萩此比のあかつき露にさきにけんかも　同【一六〇五】

玉葉に結句咲にけるかもとして入【秋上・四九四】。

169 青丹よしならの山なる黒木もてつくれる宿はをれとあかぬかも　天皇〈聖武帝〉【一六三八】

新勅に入【賀・四九三】。　」26オ

170 たかやまのすかのはしのきふる雪のけぬとかいふも恋のしけゝく　三国真人人足【一六五五】

古今におく山のすがのねしのぎ、下句けぬとかいはん恋のしげきにとして入【恋一・五五一】。

此歌万三に下句けなはおしけん雨なふりそね　大納言〔家持〕〈ミセケチ〉大伴卿とす【二九九】

171 あは雪の庭にふりしきさむきよをたまくらまかすひとりかもねん　大伴宿祢家持【一六六三】

新拾に初雪の庭にふりはへ、第四句たまくらにしてとして入【冬・六五五】。

巻第九

172 ふちしろのみさかをこゆと白たへのわか衣手はぬれにけるかも　作者不詳【一六七五】

続古に結句ぬれにける哉として入【羇旅・九一六】。

173 をくれゐて我恋をれは白雲のたなひく山をけふかこゆらん　同【一六八一】

拾遺【別・三三五】・金葉【別・三三七】に入。」26ウ

174 ひこほしのかさし〈八字、「をくれゐて我恋」を白く塗抹した上に書く〉の玉の妻こひにみたれにけらし此川のせに　間人宿祢【一六八六】

175 新古に入。よみ人しらずとす【新千載・恋四・一五一四】。

しら鳥のさきさか山の松かけにやとりてゆけなよもふけゆくを　作者不詳【一六八七】

続古に下句やどりてゆかんよも更にけりとして入。人丸とす【羇旅・八六〇】。

176 玉くしけあけまくおしきあたらよを衣手かれてひとりかもねん　同【一六九三】

新古に入【恋五・一四二九】。

177 さよなかと夜は更ぬらし雁かねのきこゆる空に月わたるみゆ　同【一七〇一】

古今に入【秋上・一九二】。これをとりて、新千

あまざかる雲路やまよふ雁がねのきこゆる空にかすむ月かげ　後西園寺入道【春上・六九】

新拾

いづくともみえこそわかね雁がねのきこゆる空や猶かすむらん　関白前左大臣【春上・七四】」27オ

178 山しろのくせのさき坂神代より春ははりつゝ秋はちりくる　同【一七〇七】

新勅に下句春はもえつゝ秋はちりけりとして入【雑四・一二六六】。

179 わきも子かあかもひつちてうへし田をかりておさめんくらなしの浜　同【一七一〇】

拾遺に第二句あかもぬらしてとして入。人丸とす【雑秋・一一二三】。

180 天のはら雲なき宵にうは玉のよわたる月のいらまくもおし　同【一七一二】

新千に第二雲なき空に、結句いらまくもおしとして入。人丸とす【秋上・四五一】。

181 さゝ波のひら山風の海ふけはつりするあまの袖かへるみゆ　槐本【一七一五】

新古に第二句ひら山風のとして入。よみ人しらずとす【雑下・一七〇二】。

182 これをとりて、

続千 しがのあまの釣する袖に月さえて雲吹かへすひらの山風　行観法師【雑上・一七五七】　」27ウ

草庵 鳩の海や釣するあまの袖ならで波にぞかへる春の雁がね【九四】

てる月を雲なかくしそしまかけにわかふねはてんとまりしらすも　春日蔵【一七一九】

続千に下句我舟よせんとまりしらずもとして入。よみ人しらずとす【羇旅・七七七】。

183 蛙なくむつたの川の河柳ねもころみれとあかぬ君かも　絹【一七二三】

後世六田にあまた柳をよめり。

新古 高瀬さす六田の淀の柳原みどりもふかくかすむ春哉　公経【春上・七二】

新勅 五月雨に六田の淀の川柳うれこす波や滝の白糸　後徳大寺【夏・一六五】

184 山〔城〕〈ミセケチ〉のいはたの小野のはゝそ原みつゝやしな君かやまちこゆらん　宇合卿【一七三〇】

新古に入【雑中・一五八九】。これをとりて、

続古 柞ちるいはたの小野の凩に山ぢしぐれてかゝる村くも　中務卿親王【冬・五七七】　」28オ

185 あまの川霧たちわたりけふ〳〵とわかまつ君かふなてすらしも　作者不詳【一七六五】

続古に第四句わがまつ君のとして入。北郷贈太政大臣とす【秋上・三〇九】。

186 いそのかみふるのわさ田のほにいてす心のうちにこふるこのころ　抜気大首【一七六八】

新古に結句恋やわたらんとして入。人丸とす【恋一・九

九三】。

巻第十

187 久堅のあまのかく山この夕かすみたな引春たつらしも　柿本朝臣人丸【一八一二】

新勅入。よみ人しらずとす【春上・五】。

188 こらかてをまきもく山に春されはこのはしのきてかすみたな引　同【一八一五】

風雅に入【春上・三一】。

189 梅のはな咲る岡へに家居せはともしくもあらし鶯のこゑ　作者不詳【一八二〇】　」28ウ

190 冬こもり春さりくらし足引の山にも野にも鶯なくも　同【一八二四】

続後撰に冬くれて春たちくらし、結句鶯の鳴として入。【春上・一六】

191 いま更に雪ふらめやもかけろふのもゆる春へとなりにしものを　同【一八三五】

新古に第四句も〈「も」は「第」の字を白く塗抹した上に書く〉ゆる春日と、して入【春上・二一】。

192 風ませに雪はふりつゝしかすかに霞たなひき春はきにけり　同【一八三六】

新古に入【春上・八】。

193 梅かえに鳴てうつろふ鶯の羽白たへに淡雪そふる　同【一八四〇】

古今に入【新古今・春上・三〇】。

194 きのふこそとしはくれしか春霞かすかの山にはやたちにけり　同【一八四三】

拾遺に入。赤人とす【春・三】。　」29オ

195 冬過て春はきぬらし〔朝日さす春霞〕〈ミセケチ〉かすかの山にかすみたな引　同【一八四四】

新勅に入【春上・四】。

196 山のはに雪はふりつゝしかすかにこの河柳はもえにけるかも　同【一八四八】

新勅に初五山本に、第四句此河柳として入。赤人とす【春上・二二】。

197 もゝ敷の大宮人のかつらなるしたり柳はみれとあかぬかも　同【一八五二】

風雅に第三句かざしたるとして入。人丸とす【春中・一〇六】。

198 いつしかも此夜の明ん鶯のこつたひちらす梅の花みん　同

199 【一八七三】
拾遺に上句袖たれていざわがそのにとして入【春・二八】。
も、敷の大宮人はいとまあれや梅をかさしてこゝにつとへり　同【一八八三】
新古に下句さくらかざしてけふもくらしつとして入。赤人とす【春下・一〇四】。　」29ウ

200 旅にして妻こひすらし郭公かみなひ山にさよふけて鳴　同【一九三八】
後撰に初五旅ねしてとして入【夏・一八七】。これをとりて、
新古
をのが妻恋つゝ鳴やさ月やみ神なび山の山郭公　よみ人しらず【夏・一九四】

201 郭公きなく五月のみしか夜もひとりしぬれはあかしかねつも　同【一九八一】
拾遺に第二句なくや五月のとして入【夏・一二五】。

202 よそにのみみつゝや恋ん紅の末つむはなの色にいてすとも　同【一九九三】
拾遺に第二みてやは恋ん、結句色にいでずはとして入【恋一・六三二】。

203 みな月のつちさへさけて照日にもわか袖ひめや君にあはすして　同【一九九五】
拾遺に入【恋三・八二五】。

204 天河水陰草の秋風になひきをみれは時はきぬらし　柿本朝臣人丸【二〇一三】　」30オ
続古に結句時はきにけりとして入【秋上・三〇七・山辺赤人】。

205 天川かちの音聞ゆ彦星と〈「と」は「の」を白く塗抹した上に書く〉たなはたつめとこよひあふらし　柿本朝臣人丸【二〇一九】
初五彦
新拾に〔彦〕〈「彦」二字分の大きさをミセケチ〉星の、結句こよひあふらしとして入。赤人とす【秋上・三三一】。

206 類聚このくれに
この夕ふりくる雨は彦星のとくこく船のかいの雫か　作者不詳【二〇五二】
新古に第四句とわたる船のとして入。赤人とす【秋上・三一四】。

207 天河とをきわたりはなけれとも君かふなてはとしにこそまて　同【二〇五五】
拾遺【秋・一四四】・朗詠【秋・二一八】にとをきわたりにあらねども〇す。人丸集【八三】に遠きわたりとなけれども有。拾遺に人丸とす。後撰に遠きわたりになけ

れどもとせり。よみ人しらずとす【秋上・二三九】。

208 天河きり立のほるたなはたの雲の衣のかへる袖かも　同【二〇六三】　」30ウ

続後撰に第二句霧たちわたるとして入。人丸とす【秋上・二六〇】。

209 まくす原なひく秋風ふくことにあたの大野の萩の花ちる　同【二〇九六】

玉葉に入【秋上・五一一】。

210 秋田かるかりほのやとり匂ふまてさける秋萩みれとあかぬかも　同【二一〇〇】

後撰に秋の田のかりほの庵のとして入【秋中・二九五】。しら露と秋の萩とは恋みたれわくことかたきわかこゝろかも　同【二一七一】

211 新勅に秋の萩とをこきまぜて、結句〈「結句」は「として入」を白く塗抹した上に書く〉我心哉として入。柿本人丸とす【秋上・二三三】。

212 秋田かるかりほをつくりわれ（イわか）をれは衣手さむし露をきにける　同【二一七四】

新古に秋田もるかりいほつくりわがをれば、結句〈「結句」は「として入」を白く塗抹した上に書く〉露ぞをきけるとして入【秋下・四五四】。

213 此比の秋風さむし萩の花ちらすしら露をきにけらしも　同【二一七五】　」31オ

新勅に第二句秋風さむみとして入【秋上・二三一】。

214 つまかくすやの、かみ山露霜に匂ひそめたりちらまくおしも　柿本朝臣人丸【二一七八】

玉葉にちらまくもおし（イおしも）として入【秋下・七九三】。

215 此比のあかつき露にわかやとの萩の下葉は色付にけり　作者不詳【二一八二】

拾遺に入。人丸とす【雑秋・一一一八】。

216 秋されはをく白露にわかやとの浅ちかうらは色つきにけり　同【二一八六】

新古にあさぢがうは葉として入。人丸とす【秋下・四六四】。

217 雁かねの寒く鳴なり水茎の岡のくすはは色付にけり　同【二二〇八】

玉葉に第二句寒くなるよりとして入。人丸とす【秋上・五九三】。

218 いもかひもとくとむすひてたつた山いま社もみちはしめたりけれ　同【二二一一】　」31ウ

219 後撰に下句今ぞもみぢの錦をりけるとして入【秋下・三七六】。
雁かねのさはきにしよりかすかなるみかさの山は色つきにけり　同【二二一二】
続後拾に第二句きなきにしよりとして入【秋下・三八九】。

220 さをしかのつまよふ（イとふ）山の岡へなるわさ田はからし（イからす）霜はふるとも　同【二二二〇】
新古に第二句つまどふ山の、下句わさ田はからじ霜はをくともとして入。人丸とす【秋下・四五九】。

221 秋田かるたひのいほりに時雨ふりわか袖ぬれぬほす人なし〈「なし」は「な」を白く塗抹した上に書く〉に　同【二二三五】
新勅に第二ひたの庵に、結句ほす人もなしとして入。人丸とす【秋下・二九九】。

222 あまとふや雁のつはさのおほひはのいつこもりてか霜のふりけん　同【二二三八】
続後拾に下句いづくもりてか霜のをくらんとして入。人丸とす【秋下・三八八】。

223 すみの江のきしを田に（イほり）はりまきしいねのしかもかるまてあはぬ君かも　同【二二四四】

」32オ

224 拾遺に住よしのきしを田にほり、下句かりほす迄もあはぬ君哉として入。柿本人丸とす【恋三・八三六】。
秋の田のほのうへにをける白露のけぬへく我はおもほゆるかも　同【二二四六】
拾遺に入。人丸とす【恋三・八三五】。

225 秋の田のほむけのよするかたよりにわれはもの思ふつれなきものを　同【二二四七】
新古にほむけの風のとして入【恋五・一四三一】。
色になる小田のほむけの秋風になれもかたよる村雀哉
通村【後十輪院内府集・六八二、新明題和歌集・秋部・二四七五】
此歌は万葉を本歌にせり。近代の歌にておもしろくとり給へるなり。

」32ウ

226 秋萩の咲ちるのべの夕露にぬれつゝきませよはふけぬとも　同【二二五二】
新古に入。人丸とす【秋上・三三三】。

227 さをしかの朝ふすをの、草わかみかくろへかねて人にしらるな　同【二二六七】
新勅に結句人にしらるゝとして入【恋二・七二五】。

228 道のへの尾花かもとのおもひ草いまさら何のものかおもは

ん　同【二二七〇】

229　後拾遺に入【続後拾遺・恋一・六三二】。

さをしかの入野のすゝき初尾花いつしかいもかたまくらにせん　同【二二七七】

新古に入【秋上・三四六】。

230　まきもくのひはらもいまた雲ゐねは小松か末にあは雪そふる　柿本朝臣人丸【二三一四】

新古に第三くもらねば、第四句小松が原にとして入。家持とす【春上・二〇】。草庵

」33オ

晴やらぬ雪げながらにまきもくの桧原くもりてたつ霞かな【八】

231　此外あまた本歌にとれり。

やたのゝの浅ち色つくあらち山みねの淡雪さむくふるらし　作者不詳【二三三一】

新古に初五やたのゝに、結句さむくぞ有らしとして入。

人丸とす【冬・六五七】。

これをとりて、

やたの野の浅ぢが原も埋れぬいくへあらちの峯の白雪　為家【冬・四四六】　玉葉

吹風のあらちのたかね雪寒てやたの枯野に霰ふる也　衣

笠前内大臣【冬・一〇一一】

巻第十一

232　旋頭歌

初瀬のやゆつきかしたにわかかくせる妻あかねさしてれる月夜に人みてんかも　柿本朝臣人丸【二三五三】　イ人みつらんか

」33ウ

これをとりて、　続後撰

初せ山ゆつきが下もあらはれて今宵の月の名社かくれぬ　後鳥羽院下野【秋中・三三三三】

233　拾遺恩

初瀬のやゆつきが下もかくろへて人にしられぬ秋風ぞふく【一一二五】

恋しなはこひもしねとや玉ほこの道行人にこともつけゝん　柿本朝臣人丸【二三七〇】

これをとりて、

234　〈歌ナシ、次の歌234を詰めて書く〉　とこ古来

ひとりぬとこもくちめやもあやむしろをになるまてに君をしまたん　作者不詳【二五三八】

新千に第二床くちめやも、第四句をに成までもとして入。

235　【恋二・一二四九】

古来にくからなくに

わか草の新手枕をまき初てよをやへたてんにくゝあらなくに　同【二五四二】

236 たちておもひゐてもそ思ふ紅の赤もすそ引いにしすかたを　同【二五五〇】

新勅に入【恋四・九四〇】。

237 朝ねかみわれはけつらしうつくしき君かたまくらふれてしものを　同【二五七八】　」34オ

万拾穂に、拾遺集【恋四・八四九】にけさはけづらじうつくしき人のと有、類句にわれはけづらじ人の手枕と有、可レ尋。人丸とす。

238 恋しなん後は何せんわかいのちいける日にこそみまくほり（イほしけれ）すれ　同【二五九二】

拾遺にいける日のため社人はみまくほしけれとして入。大伴百世とす【恋一・六八五】。

239 あし引の山さくら戸を明置てわかまつ君をたれかと、むる　同【二六一七】

続後拾（拾遺愚）に入。人丸とす【恋三・八〇二】。これをとりて、足引の山さくら戸をまれに明て花こそあるじたれをまつらん【二〇一六】

240 いはねふみかさなる山にあらねともあはぬ日あまた恋わたるかも　柿本朝臣人丸【二四二二】

い物にかさなる山にあらねどもと有【第七十四段・一三四】。

241 山しなのこはたの山にうまはあれとかちよりわれくなれを（しろ古来／さと古来／そくる古来君を古来）おもひかね【二四二五】　」34ウ

拾遺に山しなのこはたの里に、下句かちよりぞくる君をおもへばとして入【雑恋・一二四三】。類字名所山城のと有。可レ尋。これをとりて、

我駒をしばしとかるか山城のこはたの里にありとこたへよ（千載）　俊頼【雑下・一一七三】

こはた山君がゆきゝは駒にしをかちよりをくる旅ぞ悲しき（新後拾）　高階宗城【雑下・一四六八】

242 青柳のかつらき山にたつ雲のたちてもゐても妹をしそ思ふ　同【二四五三】

拾遺に初五あし引の、第三ゐる雲の、結句君を社おもへとして入。よみ人しらずとす【恋三・七七九】。これをとりて、

白雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞ吹　雅経（新古）【春上・七四】

243 しるらめやかづらき山にゐる雲のたちゐにかゝるわが心かも　式子内親王（新後撰）【恋一・七七九】

みか月のさやかにみえす雲かくれみまくそほしきうたゝ此

比　同【二四六四】　」35オ

拾遺に第二さやかにみえで、結句うたて此比として入【恋三・七八三】。

244 わかせこに我恋をれは我やとの草さへおもひうらかれにけり　同【二四六五】

拾遺に入【恋三・八四五】。

245 みなそこにおふる玉ものうちなひき心をよせてこふる此比　同【二四八二】

拾遺に結句こふる比哉として入【恋一・六四〇】。

246 あつさ弓末のはらのにとかりする君かゆつるのたえんとおもへや　同【二六三八】

新勅に第二句末の丶草にとして入【恋四・八七〇】。

247 あつさ弓ひきみゆるへみこすはこすこは社をなそこすはこはそを　同【二六四〇】

拾遺に第一ひきみひかずみ、下句こば社猶ぞよそに社みめとして入。人丸とす【雑賀・一一九六】。

248 玉ほこの道行つかれいなむしろしきても君をみんよしもかも　同【二六四三】　」35ウ

新勅に結句みるよしも哉として入【恋四・八八〇】。

249 をはたゝの板田の橋のこほれ(イくつれ)なはけたよりゆかんなこひそわきも　同【二六四四】

続後拾に第三こほれなば、結句こふなわがせことして入【恋三・八五四】

千載朽果てあやうくみえしをはたゞのいたゞの橋も今わたす也　法橋泰覚【釈教・一二四三】

新続古をはたゞの板田の橋とこぼるゝはわたらぬ中の涙也けり　源兼氏【恋二・一一四三】

此外あまた本歌にとれり。

250 みやき引泉の杣にたつ民のやむ(イやすむとき)時もなく恋わたるかも　同【二六四五】

251 とにかくにものはおもはすひた人のうつすみなはのたゝひとすちに　同【二六四八】

拾遺に第三句ひだたくみとして入【恋五・九九〇】。

252 あし引の山田もるおのをくかひのしたこかれのみわか恋をらく　同【二六四九】　」36オ

新古に第二山田もる庵に、下句したこがれつゝ我こふらくはとして入【恋一・九九二】。

253 そきいたもてふける板まのあはさらはいかにせんとかわかねそめけん　同【二六五〇】

拾遺にすぎいたもてとして入【恋二・七四六】。

254 難波人あしひたくやのすゝたれとをのかつま社床めつらなれ　同【二六五二】

拾遺に第二あしびたくやは、結句床めづらなれとして入【恋四・八八七】。

255 ちはやふる神のいかきもこえぬへし今はわか名のおしけくもなし　同【二六六三】

拾遺に入。人丸とす【恋四・九二四】。伊物に下句大宮人のみまくほしさに、なをして入【第七十一段・一三〇】。

256 大宮人の歌続千に入【恋三・一三九六】。

さくら麻のをふの下草露しあらはあかしてゆかんおやはしるとも　同【二六八七】

新勅に本行のまゝにて入【恋四・八七七】。　」36ウ

257 いぬかみのとこの山なるいさや川いさとをきこせわか名つけすな　同【二七一〇】

古今になとり川、下句いさとこたへよわが名もらすなとして入【墨滅歌・一一〇八】。

258 おく山の木のはかくれて行水のをとき、しよりつねわすられす　同【二七一一】

続千に第二木のはがくれに、結句常にわすれずとして入【恋二・一一四六】。

259 しかのあまのけふりやきたてやく汐のからき恋をもわれはするかも　同【二七四二】

新勅に結句我はする哉として入【雑四・一三三六】。

260 みなと入の芦分小舟さはりおほみわかおもふ君にあはぬ比かも　同【二七四五】

拾遺にわがおもふ人にあはぬ比哉として入。人丸とす【恋四・八五三】。

261 波まよりみゆるこしまの浜楸ひさしくなりぬ君にあはすして　同【二七五三】

拾遺に結句君にあはずしてとして入【恋四・八五六】。

第三浜びさし結句

い物に君にあひみでとす【百十六段・一九七】。　」37オ

これをとりて、

金葉

七十にみちぬる汐の浜楸ひさしくよにもむもれぬる哉

俊頼月清【雑下・六六五】

262 ながめこし沖津波まの浜楸ひさしくみせぬ春霞哉【一〇一〇】

此浜楸・浜びさしあまた本歌にとれり。

朝かしはぬるや河へのしの、めにおもひてぬれは夢にみえくる　同【二七五四】

新勅に結句〈「結句」は「第三句」を白く塗抹した上に

263 書く〉夢にみえつゝとして入【恋二・七二四】。
紫のなたかのうらのなひきもの心はいもによりにしものを　同【二七八〇】
新千に入【恋二・一二〇九】。これをとりて、
続拾 我恋は名だかのうらのなびきもの心はよれどあふよしもなし　院少将内侍【恋二・八三七】

264 かたいともてぬきたる玉のをゝよはみみたれやしなん人のしるへく　同【二七九一】　」37ウ
新勅【恋二・七一九】・続後撰【恋一・六八九】に入。

浅緑柳の枝のかた糸もてぬきたる玉の春の朝露　為家

【玉葉・春上・一〇六】

265 いせのあまの朝なゆふなにかつくてふあはひのかひのかたおもひして　同【二七九八】
新勅に入【恋四・八七二】。

266 おもへとも思ひもかねつあし引の山とりのおのなかきこのよを　同【二八〇二】
新千に入。人丸とす【恋二・一二三七】。これをとりて、
壬二 花見つゝけふもくらしつ足引の山鳥の尾のながき日影を【一六九七】

267 あし引の山とりの尾のしたり尾のなか〳〵しよをひとりかもねん　同【二八〇二或本歌】
拾遺に入【恋三・七七八】。

268 明ぬへしちとりしはなく白妙の君かたまくらいまたあかなくに　同【二八〇七】
新勅に初五あけんとてとして入【恋三・七九九】。」38オ

269 うらふれて物はおもはしみなせ川ありても水はゆくてふものを　同【二八一七】
古今 水無川ありて行水なくは社終に我身を絶ぬと思はめ　よみ人しらず【恋五・七九三】
壬二 ひたすらにたえやはてなんみなせ川ありて行水袖にせくとも【二七三七】
此外あまた本歌にとれり。

270 木のまよりうつろふ月の影おしみたちやすらふにさよ更にけり　同【二八二一】
続後拾撰〈ミセケチ〉に入。人丸とす【秋下・三五七】。

巻第二〈「十二」の誤り〉

271 ふたりしてむすひしひもをひとりして我はときみしたゝにあふまてに　同【二九一九】
伊物に此上句と同じくて、下句あひみるまではとかじと

272 ぞ思ふとせり【第三十七段・七二】。
いまよりはあはしとすれや白妙のわか衣手のひる時もなき　同【二九五四】　」38ウ

273 新古に結句かはく時なきとして入【恋五・一四二八】。
たらちねのおやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて　同【二九九一】

274 拾遺に入。人丸とす【恋四・八九五】。
あし引の山よりいつる月まつと人にはいひていもまつわれを　同【三〇〇二】

275 拾遺に君を社まてとして入。人丸とす【恋三・七八二】。
新古
君まつと閨へもいらぬ槙の戸にいたくな更そ山端の月
式子内親王【恋三・一二〇四】
新勅
こぬ人を何にかこたん山端の月は待いで、さよ更にけり　雅経【恋五・九六八】

右二首は本歌の心をとれり。
君かあたりみつゝもをらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも　同【三〇三二】

新古【恋五・一三六九】・伊物【第二十三段・五〇】・古来風体【一四四、二一二】に第二句みつゝをゝらんとす。　」39オ

276 朝な夕な草のうへ白くをく露の消はともにといひし君はも　同【三〇四一】

277 新続古に草ばに白くとして入【恋五・一五二〇】。
みかりするかりはのをのゝならしはのなれはまさらて恋こそまされ　同【三〇四八】

新古に結句恋ぞまされるとして入。人丸とす【恋一・一〇五〇】。
続拾
夜をさむみかりはのをのに鳴鹿のなれはまさらぬ妻をこふらし　光成〈「忠房親王」を墨線で消した横に書く〉

278 【秋上・二五七】
新続古
はしたかの尾ふさのすゞをなら柴のなれはまさらで立きゞす哉　忠房親王【冬・七三一】
一云絶んといもをわかおもはな
ゆふつゝみしらつき山のさなかつら後もかならすあはんとくに
そ思ふ　同【三〇七三】

新勅にさねかづらとして入。下句は本行のまゝ也【恋四・八七三】。

279 中々に人とあらすはくは子にそならまし〈「らまし」は「かへめり」を白く塗抹した上に書く〉ものを玉のをはかり　同【三〇八六】

い物に第二恋にしなずは、第四句なるべかりけるとせり

【第十四段・二〇】。　」39ウ

280 玉のをゝかたをによりてをゝよはみみたるゝ時にこひさらめやも　同【三〇八一】

風雅に入【恋五・一三三七】。

〈底本279280の歌順なれど、野外にそれぞれ「後」「前」と、歌順の入れ換え表示あり〉

281 遠つ人かりちの池にすむ鳥のたちてもゐても君をしそ思ふ　同【三〇八九】

新勅に入【恋二・七二三】。

282 さひのくまひのくま川にうまとめてうまに水かへわれよそにみん　同【三〇九七】

古今にさゝのくま空白駒とめてしばし水かへ影をだにみんとして入【神遊歌・一〇八〇】。

これをとりて、

続後撰 駒とむるひのくま川の底清み月さへ影を移しつる哉　長方【秋中・三三九】

玉葉 駒とめて影みる水や濁るらんひのくま川の五月雨の比

中臣祐茂【夏・三六三】

283 しかのあまのつりにともせるいさり火のほのかにいもをみるよしも哉　同【三一七〇】　」40オ

拾遺に入【恋二・七五二】。

284 すみよしの岸にむかへるあはち島あはれと君をいはぬ日はなし　同【三一九七】

拾遺【恋五・九二六】・古来風体【一四九】に結句いはぬ日ぞなきとす。拾遺に人丸とせり。

巻第十三

285 月も日もかはり行とも久にふるみむろの山のとつ〈「つ」は「こ」を白く塗抹した上に書く〉宮所　同【三二三一】

新勅【賀・四八九】・古来風体【一五一】結句とこ宮所とす。

286 衣手に山おろし吹て寒き夜を君きますはひとりかもねん　同【三二八二】

新古に入。人丸とす【恋三・一二〇八】。

巻第十四

287 かつしかのまゝのうらまをこく船のふな人さはく波たつらしも　同【三三四九】　」40ウ

新勅に入【雑四・一三〇一】。

288 つくはねの岩もとゝろに落る水世にもたゆらに我おもはな

くに　同【三三九二】

これをとりて、
後撰
つくばねの峯より落るみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる　陽成院【恋三・七七六】

289 たにせはみ峯まてはひたる玉かつらたえんの心わかおもはなくに　同【三五〇七】

続後拾に第二峯にはひたる、結句わがおもはなくにとして入【恋四・九一三】。

い物に第二峯まてはへる、下句たえんと人にわがおもはなくにとせり【第三十六段・七〇】

巻第十五

〈玉もかるをとめを過て〉〈一〇字墨線にて消す〉

290 天さかるひなのなかちをこきくれはあかしのとより家のあたりみゆ　同【三六〇八】　」41オ

人丸歌曰やまとしまみゆ【人丸集・五五】。

291 むこのうみのにはよくあらしいさりするあまかつり船波のうへにみゆ　同【三六〇九】

玉葉初五むこのうらの、第二とまり成らし、結句波まよりみゆとして入【雑二・二一〇七】。

292 あこのうらに船のりすらんをとめらかあかものすそに汐みつらんか【三六一〇】

人丸歌にあみのうらに、又曰たまものすそに【人丸集・三六、五七】、

拾遺に初五おふのうらに、第三句わぎも子がとして入。人丸とす【雑上・四九三】。

293 としにありて一夜いもにあふ彦星も我にまさりておもふらんやも　同【三六五七】

拾遺に入。人丸とす【秋・一四八】。

294 風のむたよせくる波にいさりするあまをとめらかものすそぬれぬ　同【三六六一】　」41ウ

風雅に初五風をいたみ、第四句あまをとめらがとして入【雑中・一七一三】。

295 ゆふされは秋風さむしわきも子かときあらひころも行てはやきん　同【三六六六】

拾遺に入。人丸とす【雑上・四七八】。

296 あまとふや雁をつかひにえてし哉ならの都にことつけやらん　同【三六七六】

拾遺に〈第五〉〈第三〉〈ミセケチ〉いつしかも、結句ことづてやらんとして入。人丸とす【別・三五三】。

297 あさか山かけさへみゆる山の井の浅き心をわかおもはなくに　同【三八〇七】

古今【仮名序】・大和物語【第百五十五段・二六〇】に下句浅くは人をおもふものかはとせり。

298 なら山のこのてかしはのふたおもてとにもかくにもねちけ人かも　博士消奈行文大夫【三八三六】

これをとりて、　」42オ

新千時雨ふるこのてかしはのふたおもてとにもかくにもぬる、袖哉　土御門院【雑上・一八〇六】

巻第十七

左大臣橘宿祢（注3）

299 ふる雪の白かみまてに大君につかへまつれとたふとくもあるか【三九二二】

新勅に入【賀・四九二・「井手左大臣」と表記】。

300 ぬは玉のよは更ぬらし玉くしけふたかみ山に月かたふきぬ　史生土師宿祢道良【三九五五】

続古に入。家持とす【秋上・四二九】。

301 しら波のよするいそまをこく船のかちとるまなくおもほ〔へ〕《ミセケチ》し君【三九六一】

大伴宿祢家持

後撰に白波のよするいそまをこぐ船のかぢとりあへぬ恋もする哉。黒主とす【恋二・六七〇】。不審。又」42ウ

新拾なでもかくあまのとわたるあまをぶねかぢとるまなく物おもふらん　基俊【恋二・一〇二五】

302 ふせの海の沖つ白波ありかよひいやとしのはにみつゝしのはん【三九九二】

守大伴宿祢家持

新勅に入【羈旅・四九五】。これをとりて、

新千声たえず聞えぞわたるふせの海に鳴や千鳥のありがよひつゝ　為藤【冬・六七六】

303 みなと風寒くふくらしなこの江に妻こひかはしたつさはに鳴　大伴宿祢家持【四〇一八】

続古に入【雑中・一六三五】。

巻第十八

田辺史福麿

304 藤波の咲行みれは郭公鳴へき時にちかつきにけり【四〇四

な【四一五三】

新古にから人の、結句花かづらせよとして入【春下・一五一】。（初五）

」43ウ

次官内蔵忌寸縄麿

305 たこのうらの底さへ匂ふ藤波をかさしてゆかんみぬ人のため【四二〇〇】

拾遺に入【夏・八八】。

306 ふち波のしけりはすきぬ足引の山ほとゝきすなとかきなかぬ【四二一〇】

続千に第二さかりは過ぬとして入。よみ人しらずとす【雑体・七〇八】。

307 袖たれていさわかそのに鶯の木つたひちらす梅の花みに【四二七七】

拾遺に結句花みんとして入。よみ人しらずとす【春・二八】。

」44オ

これをとりて、

新後（撰）まださかぬ軒ばの梅に鶯の木づたひちらす春の淡雪　信実【春上・一三】

二】

玉葉に第二花咲みれば、第四句鳴べき時はとして入。赤人とす【春下・二七九】。

」43オ

左大臣橘宿祢

ほり江には玉しかましを大君をみふねこかんとかねてしりせは【四〇五六】

続千に入【雑上・一六三七】。これをとりて、

続拾みふねこぐ堀江の芦にをく露の玉しく計月ぞさやけき　平政村【秋下・三〇五】

続後拾をし照や難波堀江にしく玉の夜の光は蛍也けり　定家【夏・二二九】

大伴宿祢家持

306 すかろ（ママ）きのみよ栄んとあつまなるみちのく山にこかね花さく【四〇九七】

歌林良材云、是によりて年号を感宝の二字を加られたりとぞ。

巻第十九

同

307 から人もふねを浮へて遊ふてふけふそわかせこ花かつらせ

311 少納言大伴宿祢家持

足引の山下日影かつらけ〈「け」は「な」を白く塗抹した上に書く〉るうへにやさらに梅をしたはん(ママ)【四二七八】

新勅に第三句かづらなるとして入。よみ人しらずとす【雑一・一一一〇・中納言家持】。

巻第二十

312 帳丁若麻続部諸人

にはなかのあすはのかみに小柴さしあれはいはゝんかへりくまてに【四三五〇】

俊頼悔離別といふ事をよめる　今更に妹帰さめやいちしるきあすはの神に小柴さすとも【散木奇歌集・八五二】、歌林良材にも出【五三五】。　」44ウ

頼むぞよあすはの神にさす柴のしばしがほどもみねば恋しき【新千載・恋四・一四八三・法印定為】

313 主人散位寮散位馬史国人

鳥とりのおきなかゝはゝたえねとも(ママ)君にかたらんことつきめやも【四四五八】

新勅に第四句君にかたらふとて(ママ)入【恋四・九三八】。

源氏物語に、

〈一行アキ〉

314 大伴宿祢家持

ふなきほふ堀江の川のみなきはにきゐつゝなくはみやことりかも【四四六二】

315 同

初春の初ねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを【四四九三】　」45オ

新古に入。よみ人しらずとす【賀・七〇八】。これをとりて、

新勅 空白ゆらく玉のを絶ざりしほど(ママ)計だに逢みてし哉

【恋二・七三八・大炊御門右大臣】　」終

注3　以下、底本では『万葉集』の歌の作者名を、歌の下ではなく、前行に記すのがほとんどである。本稿も底本の体裁を尊重し、前行に記されているものはその位置に記した。ただし、『万葉集』の巻数の下に作者名が記されている場合は、次行に移した。

（たけした　ゆたか・本学教授）